

日本文化協会報

(第八号)

発行所
日本ビルマ文化協会
大阪市南区長堀橋筋2-28
電 06-213-5858
発行兼編集人
保科賢一

特別頒布
ビルマ地図 (250円)
ビルマ語会話集 (300円)
千55円
申込先
大阪市南区長堀橋筋2-28
日本ビルマ文化協会
振替口座大阪310039
取引銀行 三和銀行 日本一支店

「ビルマ社会主義共和国連邦」誕生

国家評議会議長兼大統領に
ネ・ウイン氏を選出、
ニイ・ニイ・博士は鉱業相に昇格

ビルマの新人民議会は、三月二日の初会議で、国家評議会の議長兼ビルマ社会主義共和国連邦の大統領に、ネ・ウイン前革命評議会議長を選出しました。

これで、ビルマの民政は、十二年間ネ・ウイン政権が推進してきた、ビルマ式社会主義への道と、厳正中立を基盤とする内外政策をそのまま継承した形で新しく発足しました。

国家評議会の総書記には、前副首相兼国防相のサン・ユー将軍が選出されたのを始め、この評議会のメンバー二十八人はすべて、ネ・ウイン体制で固められました。尚ほ、人民議会は、三月四日国家評議会が人民議員の中より選んだ十八人の関係会議議員を選出、此の新閣僚会議議員の互選に

依り、セイン・ウイン前建設相を新首相に選出すると同時に、新首相は、新憲法の規定に依り、自動的に国権の最高執行機関である国家評議会のメンバーに加わりました。

此の外、当協会運営に積極的に御協力賜っている、ニイ・ニイ前文部副大臣は鉱業相、万博開催時、ビルマ館館長であったイエ・ガウン前農林副大臣は農相にそれぞれ昇格されました。

その他、外相にはラ・ボン前外務副大臣、国防相には前国防副大臣兼参謀次長のチン・ウー准将がそれぞれ昇格されました。人民議会は、ネ・ウイン大統領兼国家評議会議長の選出に先立ち、一月三日発布された新憲法に基づき、二月十日全国各地より選

出された代議員四百五十人が出席して開会式を行い、十二年間続いた革命評議会の解散と、同評議会から人民議会への国家権力の移行を宣言すると共に、これまでのネ・ウイン路線の政策の全面的継承を満場一致で承認しました。

人民議会は三月四日以降、前述の如く閣僚会議のメンバーを国家評議会の指令に依り選出した外、人民裁判官会議、人民検察官会議、人民公共事業査察委員会を順次選出、ビルマ社会主義計画党の一派支配、一院制の人民議会の下で、強力な中央指導型国家体制の整備に努力する事になります (保科記)

新国名を制定

ビルマ国では従来の国名「ビルマ連邦」(Union of Burma)を左記の如く、変更しました。
日本名：ビルマ社会主義共和国連邦
英名：Socialist Republic of The Union of Burma

新国旗と新国章を制定

ビルマでは、民政移管を契機に従来の国旗と国章を改廃し、新たに国旗と国章を制定しました。

新国旗

新国章



赤色

紺

尚ほ、十四個の星は、次の七つの「州」と七つの「地区」を表わします。

- (一)七州
カチン州、カヤ州、カレン州、チン州、モン州、アラカン州、シャーン州
- (二)七地区
サガイン地区、テナセリユウム地区、ペグー地区、マゲエ地区、マングレ地区、ラングリン地区、イラワジ地区

次に、「歯車」は「工場労働者」を、「稲穂」は農民を象徴します。



新閣僚の顔ぶれは左の通りです。
首相 ウ・セイン・ウイン
副首相兼大蔵計画相 ウ・ルウイン

- 工業相 ウ・ルウイン
- 鉱業相 ニイ・ニイ博士
- 運輸通信相 ウ・タツ・チヨウ
- 建設相 ウ・ティン・チヨウ
- 協同組合相 ウ・セイン・ウイン
- 保健相 キン・モン大佐
- 国防相 キン・モン・ウイン博士
- 農林相 テイン・ウ准将
- 貿易相 ウ・イェ・ゴン
- 労働相 ウ・ソン・ウイン
- 情報相 ウ・トン・チン
- 厚生相 ウ・ツツ・キン
- 文化相 ウ・ヴァン・クイ
- 内相 ウー・エイ・モン
- 外相 ウー・ラ・ボン
- 内務相 ウ・コウ・コウ

ビルマ国訪問記

「第二回協会親善派遣団」の部

ビルマを訪ねて

團長 小菅信一

第二回日緬親善巡拝団の一行三十七名は一月六日大勢の方々の見送りをうけ定刻十時に大阪空港を離陸、バンコク経由にて同日十七時三十分(現地時間)ミンガラドン空港に無事着陸した。

三年振りに見る空港周辺の風物は少しも変りなく、ハイビスカスやブーゲンビリアの花が長途の疲れをいやしてくれる。タラップを降りかかった時真先に私の目に写った姿は黒の上衣に赤色のロンヂーをつけられた、ビルマ文教省高等教育局長のサアン・ター・アウンさんだった、局長はニコニコと空港エプロン迄出て下され、繰返し「チェーステンパーデーとおっしゃりながら私に握手された。英語もビルマ語も解らない私にも、昨年十月に名古屋でお迎えした際のお礼を述べられていることはよく判断がつかない。局長の横には元ビルマツウリスト・マネー・ジャーのモンティンさんにもこやかにネエカウンバイエラーと握手で迎えて下さった。モンティンさんは前回訪緬の折には随分お世話になった方で十年の知己のように親しく一人一人を労ぎらって下さった。

人のように親しく接して下さるその心情は敬服の外なく日本人も大いに学ばねばならない事であり、又是非学んで貰いたい事である、そうした心情があれば現在東南アジア各国で起きて居る排日運動も或いは起きなかつたのではなからうか。

空港ターミナルビルの上には沢山の人が手を振っている、なかには大きな声で私の名を呼んでいる人々は元名古屋に居た留学、研修生の諸君達だ。私も手を振って答えながらビルの入口に向うと白の上衣に黒淵眼鏡をかけた温顔の紳士が立って居られる横を通り抜けようとした時、後ろからウ・サアンターアウン局長に呼び止められ其の紳士をドクターニイニイと紹介されたがまさか副大臣が自ら我々如きをお迎え下さるとは夢にも思わなかつたことであるから同名異人位に思い簡単な挨拶をして立ち去ろうとした時、ランゲン大教授(元名工大留學生)のシュエニイニイさんから副大臣のドクターニイニイです、と注意をうけてしまった。早速シュエニイさんに通訳をしていただき、改めてお出迎えたいたお礼を申し上げ、失礼を深くお詫言した次第である。到着早々に大変な失敗をしてかした、誠に頼りないリーダーであるが団員諸氏の協力とUBAのミヤ・ミヤ・モンさん始め皆さんの親切な案内に依り九日間の行程も事

故なく終ることが出来た。

特に離緬前夜の親善レセプションにはビルマ政府各省の高官の方々や留学、研修生の諸氏は夫人同伴にて、又在留邦人の方も鈴木駐緬大使御夫妻を始め多数ご列席下され、会場に準備した席も足りなく、急拠、席の増設と料理の追加などに担当者は大奮りであった。このような不手際や失敗にも拘わらず、来賓代表の方からは御丁寧なご挨拶を頂き、又ニイニイ副大臣からは協会宛に黒漆地に金時絵の大額を贈って下さった。

浅井時二郎君が特注して持ってきた華麗なそして日本の雅やかさのある盆提灯がやわらかい灯影を落して居る会場にてビルマ古典舞踊と、音楽の音がよく調和し、宴のつぎることなく予定時間を過ぎること実に一時間四十分、浅井君のお礼の言葉と閉会の挨拶後もあち、こち、の席ではいつ迄も、いつ迄も歓談がつきなかつた。

ランゲーンの街角

吉岡 和雄

ストランドホテルは、なかなか味なホテルである。エレベーターが三方鉄柵で囲まれ外の壁が見える。子供の頃こんなエレベーターに百貨店のような処で乗った記憶がある。建物は洋風でもとてもクラシックだ。外へ出ると海岸通りだ。朝市が出ている。野菜、米、魚、肉等食品が主になつて居るが、蠅など全然見かけない。朝食をすませて街の中心部の方へ歩いて見ると。街は大へんな人出だ。商品街を

通って独立記念塔の建っている公園へ、入るとビルマ政府が見える。赤は煉瓦が基調になつて居るが暗い感じはない。足はスレーパコダへとすすむ。ロンジー姿の女性が数人歩いてくる。原色の美しい色彩だ。不図、足元の舗道を見ると、五、六人の余りいい服装でない男達が踏み込んで何かしている。覗き込むように見ると、どうも賭博らしい。汚い紙幣を何か書いたものに張っているようだ。こんな風景は戦中一度も見たことがなかったのだが。また元の商店街の別な通りを歩いた。歩道の大半を占領している露店がある。うっかりすると足で踏みそうだ。人混みは日本と変らないなアと思っていると、不意に子供二人と子を抱いた若い母親らしなのが私の両側から、何か言いながらまつわりだした。何かこれというのだ。それ程汚い服装でもないし、目顔も至って明るい。二、三度手を振って歩いたがなかなか離れない。ビルマの通行人は見て見ぬふりだ。どうとうポケットから二、三本残っているハイライトを与えてしまった。これは与えぬ方がよかつた、一向離れようとしなないのだ。横丁へ外れて「ムカンブー」と叱って見たが更らにひるまない。またポケットのバラ銭(日本円)を出してしまつた。子供達は歓声をあげた。そしてなおまつつてくる。二百米位子供の手を払いのけながら歩いた。いささか困惑した。と向うから清潔な服装のしつかりした青年

が真直ぐに歩いて来てきびしい顔で、女や子供に何か言つて手を振った。すると三人共一斉に逃げた。青年は無言で私から離れて行った。これは一種の幼稚なたかりか? 罪のない物ほしさの本能かくて後日、シェンゴンパコダの近くで鉛筆を与えながら、いろいろ片言のビルマ語で相手になつて居ると、たちまち多勢集つて来たが、もう何もくれとは言わなかつた。ホテルへ帰る道すがらあの子供たちを叱つた青年は私服警官ではなかつたかと考えた、多分そうであらうと今も思っている。

和

浅井時二郎

ランゲーン上空が近づくにつれ、なにか違った感じがした。懐しさが先で中々思い出せなかつた。夜のとりりの中、電灯の明りが眼下一面に綺麗に明り輝いて居た。空港に降りれば静かなたはずまい、ほっとした。ロビー前には懐かしい人、サン・ター・アウンさんのニコニコとした笑顔が目に入り思わず「また来ました」と挨拶した。前回には巡拝の団員としてついで廻るのがやつとでした。今回は二度目の事でもあり、巡拝と親善と二つの行事があり、急がしい毎日でしたが、又楽しい思い出も多かった。サン・ター・アウンさんに対する来名の折のおもてなしのためか、空港へのお迎えの用事があれば

何んでも言って下さいも嬉しいお言葉でした。文化交流と口に出して言うものの実地に当るまでは中々分らない。ニイニイ博士を文教省にお尋ねして驚いた事は博士の優しき、広くもない部屋一ぱいに書籍の山、其の中へニコニコと迎え入れられた。テーブルにはケーキと紅茶の用意がしてあり、緊張してコチコチの身体が和ごみ染しさが溢れて来た。

日本のお役所の堅苦しさを感じるにつけ大変な違いだと思つた。博士のお話の中で印象に残つたのは、一部の人の中には色々と言う人もあるが日本とビルマは友好国であると言われた事である。

儀礼的な言葉ではない。文化交流とか親善とか堅苦しい言葉よりまた来ましたと言いたいようなふんいきです。

ラングーンをあとに、タウンゼー、インレイ湖の舟遊び、マンダレー、サガインヒル、パガン、イラワジ河畔での慰霊とパガン王朝遺跡の巡拝等、三泊四日の旅程を終え、ラングーンに帰りインヤレークホテルに着着した。団員の中には面会の人達が多く来られて、親善以前の親戚か兄弟と会つていろいろ風景が見られた。

キン・モンラット氏の宅に招かれ心温いおもてなし知友沢山のお集り、和やかな歓談、お嬢さん方のビルマの気品溢れる無飾、夜の更けるのを忘れるの集い、人の心の和、尊いものです。オン・サン未亡人宅へ山田さんのお供でお伺いした。沢山の御馳

走が並び、この豆はラングーン中を探して手に入れた、この野菜はモールメンから取寄せた等、未亡人自からお皿に付け分けて沢山喰べる様勧められ十二分に御馳走になった。

人をもてなす事は大変な事、何一つとつても見習う事はかり、この年になり良い勉強になった。あれを想いこれを考えても想出は尽きない。ビルマの心の友の御多幸を祈り筆をおく。

火焰樹は枯れず

山田 元八

一月六日、暮色迫まるマンダレー街道を、我々一行三十六名、第二回日緬文化協会親善訪緬団を乗せたバスは「ホテル」に向い走つて来た。

三十年の歳月は、遂に昨日のような気になる。道の処々に、ランプの灯かけがゆらぎ、どこからともなく「タナカ」や「セレ」の香が漂って来る。なつかしい「ロンデー」姿が、ゆき交うのを見ると思わず「オーイ来たよ!!」と呼びかけたくなる。

此の道の両側に、未だ戦禍の跡も残りながら、太い幹の折れた、そこ、ここから新しい芽が今は立派な枝となつて居る。それを見て私は限りない、感動に胸が迫つた。この木の姿こそ、今は亡き戦友達の声なき姿であり、新生ビルマの姿だと思ひ、一人静かに車窓に流れ去るように植えられた火焰樹に、日本とビルマの友情の将来を見た思ひで、静かに眠る戦友

とビルマの人々に「火焰樹は枯れず」と心の中に強く誓つた。

忘れられない一齣

中財 大雄

三十年來の願望が叶つて東海地区を主力とする日本・ビルマ文化協会の第二回訪緬団に随行し、九日間の、ビルマ国滞在中、数々の感銘を受けましたが、其の中で特に忘れられない想出があります。ラングーン最後の夜、インヤ

レイク・ホテルに於けるパーティーでは、文部副大臣ニイ・ニイ博士、鈴木日本大使を初め、名士多数が御出席されていましたが、美人の舞姫サン・サン・シヤ初めビルマの代表的舞姫の「ボエ」が最高調に達した時、丁度私と同じ卓に、昔ビルマ防衛軍兵備局勤務のマツテン氏(当時中尉で元陸軍中佐・現外務省の高官)が、隣りの卓の大矢上人のことを、何回も色々尋ねられるので、下手なビルマ語で「彼は元日本陸軍の軍人でビルマ戦に従軍し何度も危機に会われたが、生きて日本へ帰つた。帰国後は、戦争の空しさを感じ、日本の中部地区に入り、岐阜と云う都市で、仏門に入り多くの敵味方の戦死者を朝夕供養して読経三昧の生活に入り、余生を仏門にさ、けています。」と申すと、「何才位の方ですか」と再度尋ねられるので、「多分七〇才以上だと思ひます。」と返答しますと何度もうなづき、「此のパーティの何年長者ですネ」と云つて翌早朝の出発の折、飛行場へ見送り

に来て下さいました。そして大矢上人に杖を贈呈され、「貴僧の御健康を心から祈つております。お元氣でお帰り下さい。」と云つて握手された状況を拝見して、ア、昨夜私が下手なビルマ語で話した意味が通じたと思ひホッとして、同時に、ウ・マウンテン氏の厚意が嬉しく、ドット涙が出て来て眼の前がカスデシまりました。マウンテン氏は兵備局時代は確か兵器部の中尉だったと記憶してはいますが、すっかり偉くなり、貫録もついて立派な紳士になつておられたので最初は一寸解らなくて困りました。昔のBDA時代の方々の事もよく記憶しておられたし、小さなことまでよく忘れずにおぼえていられたのには驚きました。(BDAはビルマ独立義勇軍のこと。保科註)

ビルマの印象

松井 喜久

今度思いがけず日緬文化協会のお骨折りにて、ビルマ慰霊巡拝の旅におともさせていただく機会を得ました。

ビルマの地とは遠いとはかり考えておりましたのに、こんなに近かつたのかと感慨無量でした。あの対岸の煙のように見える大きなイラワジ河畔、川の流が満干潮で変わるシタン河畔及び日本墓地で慰霊祭を行ないました。英霊の方々は日本より持参した好物、思い出しの品々などを供えさせていただきました。また現地の方々のお蔭で、無事終る事のできました事はお礼の申しようありません。慰霊祭の間を縫って巡拝観光を行いました。信仰の厚い因柄とは聞いておりましたが、このように立派な(パゴダ)寺院がいたる所にそびえたっている姿には驚きました。

パゴダを数個所見ました。内部は広く、実に美しいものでした。そして華麗な、目を見張るような仏像が沢山並んでる姿は感嘆の外ありませんでした。中でも有名な寝釈迦の美しさは何ものにもたえようありません。あの寝てられる枕の台の美しさ、金銀、宝石など国産のものを用い作られたと聞き、古きよき時代の文化の発達を知らされました。また数多くの文化遺産も珍らしく見せていただきました。この他日本では見ることのできない広大な土地、乾燥期であるため草なども枯れてしまつたが、緑一杯の時はどんなに美しいものかと想像いたしました。また飛行機上より見た、果てしなく続くジャンゲルの起伏は見たものでなければ思ひ出せない程印象深いものと思われまふ。この間を蛇行する大河、今もまだまざと目に浮んできます。

十日間の滞在中、見るもの、聞くもの、風俗習慣の違いはありまふけれども現地の方が、私共をよく理解してくださり、どこへ行つても不自由もなく楽しく過ごすことができました。深く感謝いたしますと共に、もう一度機会が与えられまふらお伺いしたいと願つておられます。

ビルマより帰りに

水野 修安

この度、日緬文化協会親善訪緬団の一員として参加させて頂きました。

私の幼少のころよりの念願でもありましたビルマ行が小菅団長以下役員の皆様のご苦勞が報われて実現したわけです。私の父は昭和十九年九月キャグーの山中に没しましたが、私が丁度小学校三年生の時でした。母は私の為に非常に苦勞をして一人前に育て、くれましたが、私が一人前に育て、くれ過程に於いては、すでに父の面影は忘れ去られようとしていました。私も三児の父となり、父の没年三十四才を過ぎたころより、子供を育てる上にも、又、父親の責任に於いても是非とも父の事を知っておかねばならぬ、それでなくては、子供にお祖父さんの事を知らずに育ててしまおうと思ひ、ビルマ行を決心したわけです。

サガインヒル、バガン（イラワジ）、シタン、タムエ等の各地にて慰霊祭を実施して頂き、幼少の頃去って行った父の面影が次から次へと想い出されました。出征の時、大井駅（恵那）で、小学校一年の私の手をシッカリ握り、しっかりやれよ、しっかりやれよと何回も何回もくりかえし言って行ったあの顔、あの言葉がハッキリと思ひ出され、涙を新にしました。来て良かった、本当に良かったです。……

行って行った。血氣盛んな若人が両親を離れ、妻・子供とも離れ、又兄弟にも離れ異国の地に、自由の喜びも知らず、国の為に散っていった。シタン河には数方の遺体が没したとか、やはり実際に行き実際に体験した人に聞かなければその実感が湧いてこない。何ん自由なく恵まれ育って来た我々もこの様な尊い犠牲があればこそ生活できるのであると云う事を心に銘じ、子々孫々まで伝えるのが我々の使命ではなからうか。インヤレークで恵那市の隣りの中津川市へ三年前トンネル掘りの研修で来ておられたトン・テインさんにお逢いしましたが、あの広大なビルマの中でお逢い出来るとは全くの奇跡としか思われませんでした。そして彼等が非常に親切でした。これも文化協会の皆様の御努力の賜物だと思ひ深く感謝致します。ビルマの皆さんの親切にむかひる為にも、若い人達もしどしど努力してビルマの国の発展の数々に参加しなければならぬと痛感致しました。

「後記」会報をお借りしましてお願い致します。父の事をもっと知り度い為、知っている方がみえたら是非お便り願います。父の名前「水野義久」名古屋三七五一部隊、キャグーにて昭和十九年九月二十四日病死、水路輸送に出ていたことがある。宛先 岐阜県恵那市長島町永田 二二五〇二 TEL 七七八五六一 五〇九一七二 水野 修安

巡洋の旅より帰りに

山内 正一

今回、私達の永年の夢が実現されて来た。父・兄、そして我友の眠るビルマの国へ第二回日緬文化協会親善巡洋団の一員として彼ら地へ参る事が出来た。一月五日、大阪空港ホテルに於て小菅団長以下三十九名は結団式を完了。

一月六日（日）午前十時、大阪空港発シガポール航空にて香港を経てバンコック着、バンコックよりビルマ航空に乗り換え同日夜懐かしいラングーンへのミンガラドン空港に無事に到着しました。ビルマでの巡洋期間は九日間でした。タムエ日本人墓地、オンサン廟の参拝、サガインヒル、マンダレーヒル、イラワジ河畔、並びにシタン河の渡河点に於て戦没英霊に花束を捧げ追悼供養を完了しました。終戦後三十年の歳月がたちましたが何時迄も変らぬビルマの皆さんのほのぼのとした友愛感を身近に感じながら帰国致しました。ビルマ全土に眠る十七万余の英霊の御遺骨の収集が一日も早く完遂出来ませぬ事を念願して止まませぬ。

「パゴダ」への一遺児の誓い 本藤 千幸

父の戦死は終戦直前の七月三十一日で誠に無念ではあります。これも国の為、かねてより覚悟して居た事ゆえ、致し方無いと存じます。以来今日迄、二十九星霜の歳月が流れ去りましたが、幼き頃よりの私の悲願……。そして生涯を賭けた夢……。それは遙かなる異郷の地、ビルマに永遠に眠る父達を慰霊し供養するべく必ずビルマに行く事でした。ビルマに行ける様、八方手をつくして探しましたところ、日本ビルマ文化協会の方々が巡洋親善に出かけられる事を聞き、早速参加を申込み、東海支部長の小菅信一様の快諾を得まして、去る一月に二十九年振りにて悲願を達成する事が出来ました。これ、ひとえに、日緬文化協会のお骨折りと、ビルマで永眠されて居る十八万五千有余の諸英霊のお導きのお蔭だと信じ、深く感謝致す次第です。一月六日夕方、生れて初めて、ビルマの地を踏みしめ全く感無量でした。

話には聞いていた、なつかしいビルマの国をこの目、この耳で確かめ、ビルマの人々の暖いもてなしを受け、又各戦跡にて、ビルマの僧も一緒に盛大なる慰霊祭を催していたゞき、只々感謝の念でいっぱいです。一月十二日午後一時半は、私の待ちに待ったこの二十九年間の悲願成就の日でした。父の戦死した近くの場所で和尚様の、しめやかな厳かな誂経の内にシタン河の上流より、なつかしい父上の姿が臉上に浮んで来て、思わず大声を挙げて父を呼び叫びました。そして父に子供の如く甘え、男泣きに泣き叫びました。一緒に行って下さった戦友の皆さんも心やさしく一しよに泣いて下さいました。きっと英霊も喜んで成仏して下さいと信じます。帰らぬ道、各地に林立するパゴダの群れが夕陽に映えて美しく輝き、広大なビルマの西空の彼方にゆつくりと沈み行くビルマの大きな真赤な太陽が、とても美しく印象深く、一生涯私はあの光景を忘れないでしょう。ビルマでの或る早朝起きたって一人で朝市に出かけ歩いてみました。ビルマの人の群れの中にとけ込み、下手な英語とビルマ語と日本語とを交ぜながら話しかけてみました。みなさんとても親切で、ニコニコしながら、いろいろと答えて下さいました。縦い国、人種言葉は違っても誠意を持って接したなら、心は必ず通ずるものだと、遠く日本を離れて、しみじみと感じました。「恵那の人は居ませんか」と、私共を訪ねて来て下さったトン・テンさん兄弟、名古屋に居られたソー・ミントさん、日本語漢字の、ものすごく達者なチャョー・ミンさん、日本軍の元通訳だったタン・ジュエーさんアング・チャンさん、約十日間全ビルマの日程を付き添って下さったタン・タン・セリーさんの二人の娘さん、その他大ぜいの人々、とても親切

で、ビルマ人の心の暖かさを、思い知りました。

生活は、たとひ質素であっても心が豊かなパゴタの国ビルマの人々。それにくらべて、日本人の物資ばかり豊かで、心の貧しさ。これはビルマの人々に見習わねばならない大切なものだと思います。あの沢山のパゴタに囲まれ素朴ではあるが幸せに満ちた大らかな国ビルマ。発展途上の青年の国ビルマ。なつかしい地、去り難い地に別れを告げなければならなかった。もつと居たかった私でした。

あの美しいパゴタに私は誓いました。

「ビルマと日本は、同じ顔で、同じ心でこれからも、兄弟として末長く手を結び合つて世界平和の為に頑張ろう。」と。

今、私のところに、ビルマで友達になった人から、次から次へと手紙が舞いこんで嬉しい悲鳴をあげて、夜遅く迄、下手なローマ字の手紙を書いたり、贈り物の準備に追われています。

訪緬感想文

林 安吉

◎ビルマを代表するパゴタの群れ。

◎仏教の長い歴史に培かれて敬虔なる信仰で日々の生活を送っているビルマ人。

今度の訪緬は、昭和四十五年十一月の第一回巡拝についで、二度目ですが、彼等現地の人々は、いつに変わらない素朴さと誠実をもつて、我々を迎えてくれた。

広漠たるイラワジ平原、峻峻なるアラカン山脈、遠く紫にかすむマユの山なみ、はてしなく続く水田と迷路の様に幾条にも伸びる水路、南国の風にゆらく椰子の木立ち、地平線のかなたまで連なるパゴタの群れ、金銀にそして純白に燦然と輝く寺院、真赤なセクパンの花、マンゴの実、……。

ビルマを語るには三十年前も、そして現在も同じ言葉で云い表すことのできる国です、物質文明の益々エスカレートする世界の中にあつて、悠々と精神文明のマイペースで歩む姿は、なにか私の胸にほのぼのとした懐きを感じさせる。

さいはては戦線であり戦争中は言語に絶する苦闘悲愴をなめ幾度となく死を覚悟した処、生への執着を無くした六年間の体験は、ことの善悪はともあれ心の中に今も大きく存在している事を自覚せざるを得ない。ビルマは、私の第二の故郷と云えるでしょう。しかしそれは独りよがりの懐きであつてビルマ人にとって第二次世界大戦は、自分の国の山野を荒され関係の無い多く現地人が戦争の犠牲となつてゐる事実を……。

それにもかゝらず官民一体となつて心から歓迎し、親切の数々

は、私達にこれからのビルマの人々に對して、いかに報いていくかを謙虚な気持ちで考え終生の課題として実行しなければならぬ。私達はサガイン、イラワジ河畔、タモエと亡き戦友の慰霊と日緬親善交歓が主な日程であつた。友の永遠の冥福と加えて親緬を目的とした日本の団体が機会ある事に訪緬されん事を切望します。

無題

勝又 広基

サガイン・ヒルに立つチンドウイン河に沿つて眼下にパゴタ群が広がるパノラマを見る様なのどけさだかつては多くの戦友が血み泥な攻防戦を繰り抜けた場所かと懐うあまりにも平和そのもの、部落

人的公害のない昔日の面影を止めたま、ココンベイの並木の巨木に古傷が点々と残されている一行三十六名と堂守の外はカレー等が物見高に参加した静かに敵さかな中を大矢矧三倍侶の脱経が焼香の煙りと共に

パガン王朝の古都と共にイラワヂの河の流れは変らぬ憶この大河

戦友幾万をも呑んだの今もイラワジ河は滔々と音もなく流れゆく夕映のみが眼に

いつまでもしみ入るビルマ国にとつての拠点統制下の慰霊祭

愛馬松遷の背に伝令として登破し渡河したこの地点時移り

桜花乱舞し雨期に渦巻く濁流は三万の行手をも阻む

全員の嗚咽渡河点を包む

ビルマを訪れて

興野 義一

訪緬巡拝のことは元一二一兵站病院(明妙)で一緒だった松山さん(犬山市)の所に泊めて頂いた昨年八月知らされた。松山さんと再会できえ二十七、八年ぶりに戦地で別れて以来のこのことであつた。松山さんは第一回の巡拝団メンバーである。従軍当時、印緬国境附近の花や鳥を丹念にスケッチして何十枚と持っていた。終戦そして連合軍の武装解除という段になって松山さんは我々の止めるのもきかず惜しげもなく焼却してしまつた。松山さんは絵も文人は

だしたが、語学の天才でもある。専門の英・独・仏語は勿論、ビルマ語、タイ語の読み書きも現地でやつてのけた。東大在学中、サンスクリットの素養があつて、ビルマ語に大へん興味をもつたらしい。ビルマは第二の故郷だといっ

ていた。私も花鳥や自然、人種や民俗に興味をもつていたので、今回はカメラに物言わせて盛に撮りまくつた。

松山さんの口ぞえで小菅団長からコース外の明妙行を快よく許され同行四人で訪問できたことは最上の喜びであつた。タウンジーと同じ環境で桜が満開であつた。明妙の桜をみて私は云うことなしの心境である。一月は乾期なので概して花は少ないようだ。それでも仏桑花、ブーゲンビリア、セクパンなどはなつかしかった。パガンの宿舎前に爽竹桃が咲いていたが、毎日水やりをしていた。ヘーホ附近で橙色の花が一面に咲く高い木があつたが名が分らない。鴉はイヤ・レイク・ホテルでキヤアマヤア啼いてうるさな程だつた。キングダレイで紋付鳥をみた。蝶は遂におめにかからずじまい。トツケも螢もジャスマミンの香も雨期にならねばだめらしい。やはりビルマは一年通して住んでみて始めてビルマの味わいがでるのであらう。

北九州

「足立ライオンズクラブ」の部

報告 小崎 啓輔

日本ビルマ友好使節団は北九州足立ライオンズクラブの会員が中心となつて結成された。

ビルマ訪問の機運が生れたのは小倉区魚町銀天街の合資会社スリ福社長、瀬口祐吉氏が実兄がビルマで戦死したところから、昨年一月、遣族参拝団の一行に参加してビルマを訪れ、この国の国民が人情にあつく、日本人が驚ろくほど

純情で、親目的なことを知り、二月の卓話でその報告を行ったことに端を発している。

また瀬口氏の写真技術は完全なプロ級。ビルマ各地の名所、旧蹟を撮って帰る昨月五月、小倉玉屋で日本ビルマ文化協会(大阪市南区長堀橋筋二二八)と力を合せ、写真展と物産展を掛け、この時の純益金二十万円で掛時計を五十箇、日本ビルマ文化協会が百五十箇、あわせて二百の掛け時計をビルマに贈ったことがある。

世界大戦の末期、ビルマ戦線における日本軍の凄惨な大敗走は歴史に残るものであったが、当時のビルマ人はボロボロの様になって退却する日本兵に対し、食糧を与えたり、民家に負傷兵をかくまってくれ、その人間に負傷のおかげで命を保った兵士も多し。

然し、決定的な食糧不足と物量戦を挑む英軍、中国軍の攻撃で戦争中最大といわれる戦死者を出した。しかも福岡県出身者が一番多く、現在わかっているだけでも二万数千人に及び、全国一という。

だが、その時のビルマ人の愛情は忘れ難く、現在も消費物資が極端に少ないことを知った足立ライオンズ会員の中から、「それでは戦死者の慰霊とビルマに不足している医薬品や生活用品を運べるだけ運んで、せめて感謝の気持ち伝えようではないか」という話が起った。

この親善旅行が具体化されたのは去年八月頃から。有志を募ったところクラブから十二名、一般人

七名、それにビルマ育ちで、日本語よりビルマ語の方が達者という大阪外大の原田教授が加わり二十名となった。

一行の中には眼科医師の荒木、浦田氏、皮膚科の土井氏、歯科の下平氏、それに海軍兵学校に学んだが一度も実戦に参加しなかった秋水建設の宮原社長ら多士済々。早速ビザを申請し、ビルマでは一番氣候が良い一月はじめに出発することになった。

年末の三十一日、一行は英文タイプ10台、電子計算器10台、老眼鏡30、文房具一式、交換用の小学生図画三〇〇枚、医薬品を荷物で送り、あとは各人二、三枚の下着と公式レセプション用の背広、ネクタイの外、持てるだけの文房具や医薬品をさげて勇躍出発した。足立ライオンズクラブが五十六万円で寄付してくれたほか井筒屋や銀行、菓のメーカーなどが協賛してくれ金額にすると二百万円を越えた。その上、一行は旅費の外に一人が一万円以上の贈呈品を買って行った模様である。特に医師は現地での診療もあり、多額の医薬品を個人で購入したという。

一月一日はラングーンに一泊、二日から実質的な親善旅行が始まった。マンダレーのサガインヒル付近で第一回の無料診療。集った住民たちにボールペン、マッチ、ノート風船、チューリンガム、ティッシュペーパー、カレンガムなどを進呈したが、ボールペンやカレンダールが一番喜ばれたという。

小学校で鉛筆、風船、プラスチックの竹トンボなどを進呈して子供たちは歓声をあげた。三日はマンダレーからバガンに向った。ここはバガン王朝が千年前に栄えたという古都、十一世紀に建てられた有名なパゴダがあり、いまビルマ政府は観光地としての受入施設を工事中だつた。

アナンドパゴダ付近で二回目の診療を行ったが、水浴のせいからラコーム患者が多く、浦田、荒木の両氏は治療に大奮闘、目薬を多数渡して来た。四日の朝は病院をたずねて医薬品を一箱包進呈した。

続いて、バガンからサンドウエイと回り、ここからタンガツプに向う予定だったが、橋がなく筏では四時間もかかり日帰りは不可能という話。小崎氏はかつての戦友たちからタンガツプ訪問を強く頼まれていただけに、残念だったが、やむを得ずサンドウエイの海岸でタンガツプの方向に向って慰霊祭を行い全員で「海ゆかば」を合唱したが万感胸に迫る思いだったという。

ここで三回目の診療、前もって通知してあったので多数の住民が待機しておりやっつと百十名ほど治療して医師はクタクタ。外に三百人ほど鉛筆やボールペンを手渡した。また診療所に医薬品一箱包を進呈してきた。サンドウエイからチャーターしたビルマ航空の旅客機でラングーンに向ったが、途中、タンガツプの上空を通ったので低空で何度も

旋回して貰い、はるかに上空から戦死した友人の霊を慰めた。誰いうとなく今度は「眺に祈る」の合唱が始まり、原始のままのタンガツプの空に歌声が拡がって行った。

五日はラングーンのエミ墓地に参拝した。ビルマ人は公平で、壮大な墓地の中に日本人、英国人など国籍毎に墓碑を建て、綺麗に手入れが行届き、法要も営まれていた。また世界一というシエダゴンパゴダにも参詣した。午後六時頃からラングーンライオンズとなごやかに交歓を行い、ロンジ(腰布)などを進呈して歓談につきるところがなかったという。

ささやかな親善行為だが、これが芽をふき育つことを祈っているアラカンを超えて 伊藤 正輔

遠く雲流るる果てに、征きて還らぬ兄の影を追って、いつの日にか訪ねんものと念じていたビルマ弟よお前もビルマへ来いと便りを残して征った兄、そのビルマへ今日行けるのである。出発に際し、生きて再び手に触れる事なかつた兄の遺愛の胸心器と肉親の分髪を懐に秘めて、訪緬団の一員となった私だが、今そのビルマに私は立って居る。やがて我々を乗せたUBA機は幾万の英霊が眠る上空を翔けること数日、其の間幾多の善良なビルマ人に接しながら一月四日アラカン山脈を越えて遂に紺碧に輝くベンガル湾を臨むサンドウエイに到着した。

ビルマに散華した幾万の同胞に對する慰霊と現地人に対する報恩を目的の一つに加える我が訪緬団は、タンガツプ或いはその近くに於て慰霊式を計画していたのである。

白砂に椰子の緑が殊のほか美しい、波静かな入江の、静寂な場所を選んで式典は行われた。何処からか古びた椰子の実を運んで来て碑と為し、日章旗とビルマ国旗を飾り、祖国の小石と我が分髪を添へ、内地の煙草や誰か手折つてきた白い野花等が供へられて趣を加えた。時に、静かであった浜が急に風騒ぎ、国旗はゆれて鳴り、ローソクや線香の火等もつけ難く、此の幽漠とした地に眠られる英霊が挙って我々の前にあるが如くにさえ思はれた。その嚴肅な中にやがて式は挙行され、最後に「海征かば」を斉唱したが落涙して言葉

を為さず、そつと眼頭を拭う人も多く式後、汀に貝殻や小石を拾う姿がひとしほあわれをさそった。すべてを白砂の中に埋め、その上に椰子の実を安置して、安らぎにも似た心を噛みしめ乍ら我々は此地を離れたのである。時計は進み、黄金色に輝く牡蠣なベンガル湾の落日に感歎している中に、我々の飛行機はラングーンに向うべく、此の夕陽に向って離陸したが、特筆に値する事が此の後に我々を訪れたのである。そ

皆の眉間にたてじわが寄り「いつたい今日ビルマへ行けるのか？行けぬのか？」と言はれて泣きたい思いがし、更にラングレン、ミンガラドン空港税関で通関に大分手間どり、「プレゼントの品々なのに、何故そんなにやかましいのか……」と皆の顔は疲労といら／＼と不安で実にけわしかった。

翌朝早くマンダレーへ出発、アマラプラ、オッパレイパゴダ、サガインと廻りイラワジ河畔の砂浜で弁当を食べる頃には幾分顔がなごやかに変わった様だ。第一回診察で民衆に接しプレゼントをする。マンダレーヒルのパゴダに参詣・靴下迄ぬぐ頃には「にわ島始め!!」の冗談も出る程ビルマにとけ込み始めた。

マウン・マウン・ティン教授のお世話で夕食後ビルマの堅琴の演奏を聞き、翌日バガンの広大な眺めに威圧すら感じた我々には最早や、秒単位で物を考へ、分単位で動き廻る日本人の生活から遠くかけはなれ、「三十分や一時間どうと言うことはないさ……」と云う。大人の風格さえ出で、皆見ながらに柔和な顔になってしまった。

悠然、壮大な風物。善良な民衆。の偉大で不思議な影響力である。

ビルマ国内旅行中も、帰国の途路も、同行の人々から握手を求められ、感謝の言葉を聞き、「次はいつ訪問するの？」と話しかけて来る人も居り、計画者の一人としてこれ程嬉しい事はなかった。

慣れない添乗員の仕事をしたので多々至らぬ点があったと思うが同行の士がこれ程喜んでくれたのは、本旅行が一応成功であった証と自負している。そして二十名の心にビルマへの愛情の火がともり広がり、いつ／＼までも消えない事を願ひ、信じている。

ビルマの事を話し出すと熱がこもり、時間がたつのもつい忘れ勝ちだが、思う程に不思議な国である。しかし何故だろうか考へるだけで、結論はまだ／＼先の事の様な気がする。我々はビルマに因してはまだ新参者であり、長い年月をかけて交際を深め体と心で覚えなければ結論なんて出るはずがない。これからの楽しみである。

魅惑の国ビルマ

笹木かつみ

北九州足立ライオンズクラブ主催の訪緬使節団に同行して、一月一日より六日間のビルマ生活により、最近の私はビルマの話が出る時、嬉々としておしやべりに一層の拍車がかかっている由、それ程までに私の心に幸福が与えられたことは事実です。「来ましたよや」と今、念願のビルマの地へ来ました。飛行機より下り立ち一歩／＼浮き立つ感情を押さえる様に大地を強く踏みしめて四時間も遅れて入国した我々を待っていてくれ、始めて逢う友達ランの花東で出向えて下さった感激。

各地の旧跡、碧空に燦然と輝く視野を遮る不自然な物もなく荘厳なパゴダの群、海岸線に沈む太陽を椰子の木々を通してたゞ茫然と眺める自然の雄大さ、美しさ、そして安らぎを授けられた感激。眠るのが残念であるが明日又次の地で感嘆するであろうその為のみに睡眠を取り、マンダレー・バガン、サンドウエイ、そしてラングレンへ向う途中UBA機長の御好意によりアラカンのジャンクルを低空飛行で旋回し英霊に黙祷を捧げ、全員で「暁に祈る」を声高く合唱出来た時の喜びは忘れられませぬ。村々での医療、病院の見学、医薬品のプレゼント、織物工場の見学等、各地の人達と接触しながらの旅行は日を追ってこの国の魅力を増し、今まで身に付けていた人生観を反省しなげればならない点を少しづつ洗い流してでもくれる様な聖地に居る気持です。小学校で児童達の歓迎を受け学用品のプレゼント、その美しい眼に何とも云われぬ魅力と純粋な人間の随を見せつけられた様で胸打たれました。

某氏曰く「ビルマには人間の原点がある」。その意味するものが何であるか私なりの解釈で多少なりとも掴み得られた気がいたします。

最後の夜、宿舍のストランドホテルにて開かれたレセプションにはネ・ウイン首相の弟君家族やニイニイ博士をはじめビルマのライオンズクラブのメンバー、日本の元留学生達との最初は少し緊張したものの始めて会う人達とは思われぬ程の親しさで片言に身ぶり、

手ぶりよろしくの会話でも意志の疏通がなされ、帰りましたから手紙を頂くなど心暖まる友情は幸福と共に心に大きな財産をいたさきました。同世代の人達との輪を広げ、交流される日も遠くないものと楽しみにいたしております。

文化協会のパッチが無限の友好を示すだけでなく、この体験により日々の生活にも勇氣と真心を持って……という教訓にも以た気持以上には何物にも勝るアクセサリーとなつていきます。私の同行を心よく迎えて下さった北九州の紳士諸氏に感謝し、二月三日小倉にて開かれた写真の交換会兼親睦会は七時間にも及ぶ大饗宴となりこの会を称して「チャット会」と命名。ビルマに魅了された感激は又、是非行かなければ……とそんな気持にさせられる不思議な国でありました。

昭和四十九年一月二日
ラングレンよりマンダレーの機上にて

「創造の神よ
あなたは、何と不平等を人間に押しつけるのか
二十世紀も終りに近い 今日
一方で、文明の恩恵を 充分満喫している人を創り
此処では文明の遅れを意にも介さず
苦しき 悲しき さえも
超克している 人を創る
あなたは

これを原点と呼ぶか
私は思う
「我々は原点に帰らねばならぬ」と叫ぶ人がいる
しかし原点というものが
この国の自然への願慮につながるとするならば
私は原点に帰る事を拒む。
「ビルマ初訪問の直感として何ともいえない神に対する憤りをこめて」
「昭和四十九年一月六日、前回より五日経過 ビルマよさよならの時に」
幸せとは欲もなく得もなく
素直に天地自然に順応し
この世の虚偽と忿激と羨望とあらゆる人間の神に対するはじらいを捨てる事ではないだろうか。
現在の日本ではそれを笑う人がいるだろう ならば 笑え
文明の萌となつて
幸せの定義すら感じ得ない
人達に深いあわれみを憶える。
「わずかなビルマ滞在であったがビルマに教えられるものの何と大きかつた事か。」

噫ノビルマ
井生 菊雄

サガンマンダレーにて
イラワジの河畔に遊ぶ童等見つ、
文化の世の幸しはしうたがう
イラワジの流れ静かに水鳥の
牛の背の上にたわむれ遊ぶ
王宮を廻らす皆の水静か
過ぎにし昔忘るること

瀬口 祐吉

王宮を廻らす皆の水静か
過ぎにし昔忘るること

パガンにて

ひねもずにパコダの石に伏し拝み
かほそき腕で経を唱えつ
外庭の灯火を慕う虫の音で
しばし故国を想い出し見る
朝もやの静かにけむるイラワジ河
おもい／＼に石を拾いし

サンドウエイにて

椰子の樹のつらなる磯の白砂に
祖国の石を埋めて帰りぬ
ベンガルの波静まりて落日は
椰子の樹蔭を宋にそめつ、
日本の秀でし医薬で刻早く
治療のめぐみほどこしみたし

協会員グループの部

三たびビルマを訪れて

中村 源三

(A) メーカーテラー
ランゲーンの一「ストランドホテル」を午前六時に出発した。ビルマの人々はもう活動を始めている。ミンガラドン空港に着く頃は東の空は美しい朝焼けだった。小鳥の囀りが冷々とした朝風の中にすきとおる様に聞える。

DC3型のチャーター機に一行十六名は搭乗したが朝霧のため約四十分待機する。その間に朝食をすませ、機はベグート、ンゲールを過ぎ廻り道をしてタツコンの部落の夜空にさしかかる。特別にお願いで低空を旋回していた。同行のN軍曹未亡人のためだ。一同当時を偲びつゝ、黙禱を捧げN軍曹に呼掛ける。
メーカーテラー軍用空港に着陸

すると、空港長が御出迎え下さっていた。温い歓迎に厚く感謝してバスに乗る。約十分で美しい湖畔に着く。皆の心はもう三十年前に帰っている。こゝで何があつたなあ、あの時は；とか口々に云い会い乍ら胸がこみ上げ涙で目がかすむ。

早速元26防給の我々の部隊跡を探しに行く。中央の橋を渡り市街地に入り牛車や馬車の中を抜けてバスは湖畔へと走る。一昨年日本印緬戦跡慰霊団の通つた同じ道を行く。当時団が湖畔のシェンエチャーインエタイ寺に忠霊碑の建立をお願いされたので、先づその寺を訪問する。石碑は立派に建立され吾々を待っている様だった。お寺の任職に厚く礼を述べた後、僧に読経をお願いし慰霊祭を行った。実に偶然か吾が部隊の駐屯跡は其寺の路跡をへだてた向い側だったとは。

今静かな湖畔の寺院に立ち三十年前の激戦を想うと夢の様な気がする半面、多くの人々の犠牲に支えられた平和への道を進むべく努力しようと思ひあつた。

(B) マンダレーの得度式

マンダレーの映画館のコーヒ店の主人モウ・チョウ氏の案内で馬車に乗って時計台の夜店を見学に行つた。夜は少し寒いぐらいなのでセーターを着て行く。公害のないマンダレーの星空は実に美しい。マンダレー城のお堀端の道を蹄の音も軽やかに進む。料金は2チャットだそうだが市場に着く。た

ー・エンヂー、女の子が顔へ塗る粉・棒・硯・ビルマ菓子・宝くじ、本当に楽しく約1時間買物をして廻つた。市場を少し離れた所のモウ・チョウ氏の宅に案内され一家総出で歓迎された。パイヤー・バナナ・コーヒー・西瓜等々。ビルマの人々は本当に皆心の温い信心深い人々だ。

マンダレーの最後の日第三日は午前中自由行動だったので三人が象牙屋にモウ・チョウ氏の案内で行つた。買物のあと我々がビルマの得度式が見たいと云つたので象牙屋の主人が自家用の自動車で行つた。場所まで案内して下さつた。話に依ると一週間は続くそうだが先づ入口で靴を脱ぐ、少女が花を捧げてくれる。大きなテント張りの小屋の中には町内親類の人々が五十人程集まっているのだらう。左側に仏様が祭つてある正面に祭壇があり得度を受ける青少年が美しく着飾って並んで座っている。頭には金ピカの鳥帽子を冠っている。

青少年合せて二〇名は居つただらう。少女は耳に穴をあける式。少年はお剃りの式を行うこと。右側にはビルマの音楽隊が8人程歌い乍ら演奏している。シロホン製の船形打楽器。竹を合せた打楽器。ボンゴ式太鼓。ひょうたん式太鼓・笛、とても美しく珍しく30分程見学させてもらった。ポロライドカメラが非常に役立つ皆に喜ばれた。吾々にはコーヒーとセ

レを接待された。本当に懐しい、楽しいマンダレー。そしてビルマ

の田舎の人々。こんど行つた御遺族の方もこんな美しい心の優しいビルマに、そして夫の眠るビルマに永久に住みたいと云つておられた。さらばマンダレーよ！！又来るまでは！！

うましの国ビルマ

岡本栄之助

メーカーテラーで第一回の慰霊祭をつとめた一行は、風光明媚な湖を眼下に、再びチャーター機でニヤンウに向う。十一世紀から十三世紀に亘るパガン王朝の遺跡は、ビルマ観光のメッカとも云えるであらう。半日観光とあつて、遺跡中唯一の金色パコダであるシェンエジョコン・パコダ。又最も絢爛豪華で、内部に金色の巨大な仏立像四体を蔵するアーナンダ寺院。更に豪壮雄大で高さ二〇〇呎と最も高い窟院で、頂上からパガン・パコダ群の広大な景観が一目で見渡されるタツピンニョー窟院と、三代表寺院を回つたのみで物足らぬ思いであつた。この地に昨年新しいホテルが出来た。愈々観光地として脚光を浴びることにならう。残照にかすかに映つるイラワジの河面からわたる涼風、満天の星空の下、静寂なホテル、ペランダの夕涼み、日出前の朝やけにくつきりと浮び上るパコダ群のシルエット。汚染と騒音に悩まされる近代人の憩の場として絶好のものであつた。

翌日マンダレーに入り、元部隊のビルマ最初の集結地、王城の西側で三十年今尚ほ変らぬ郵便局、

その向側にあつた元部隊本部跡で第二回目の慰霊祭を厳粛に行ひ、ビルマの地に散華した英霊をお慰めした。朝霧にかすむマンダレー・ヒル、昔変らぬ王城濠の静けさここで激戦があつたとは想像も出来ない。時計台周辺の夜のマーケットも賑わで、一行の小沢氏が「オー・マスター」と呼びとめてくれる旧友に感涙した一幕もあつた。京都にも似た王城の地、マンダレーの街も、純情無垢な現地人の人柄も昔のまま。「アー、ビルマに来てよかつたな」というのが実感である。

サガインの修復なつたアバ鉄橋の下手のイラワジ河畔で第三回目の慰霊、川施餓鬼を行い、河に水塔婆と供花を流して英霊の安からんことを祈つた。サガインの街を離れて六哩、半球形をした巨大な白色のパコダ、「オツパイ・パコダ」で知られるカウンフムドー。パコダを訪れた後、絶え間なく両側に立並ぶ見事な並木道をシェンエポーに向う。街の入口の橋のたもとに朝から一行を待ちうけてくれた現地人の旧友と三十年振りに再会。ここはシェンエポー分遣隊が防疫に給水に活躍したところだ。しかし分遣隊跡に残るものは僅立するニッパ椰子一本。ここでも三十年振りの再会を喜ぶ本間氏の姿は忘れることが出来ない。現地人の家に招かれ、家族総出のもてなしで昼食を摂る。引続きシェンエポー第三ハイスクールにキン・ター・ウー女校長を訪れ、ささやかな慰問品を渡す。生徒達が一〇〇名以上

も集つて揉みくちやになる。ほほえましい日顔親善風景であった。

翌日は元部隊の一部が現地でもコレラやペストの予防接種液を製造し、防疫活動に励んでいた。懐しのイチミヨを訪れた。先づ陸軍墓地に花束をささげ、分遣隊跡を探しもとめたが、遂に発見出来なかつた。昔のままの時計台とその周辺、美しい植物園の桜は満開、何れも懐しい思い出ばかり。

一行はひとまず訪緬の目的を果し、ラングーのシェダゴン・パゴダに到着した頃は、既に日は落ち、数多くの小パゴダの尖塔に電灯のあかりが輝きはじめた。巨大な金色の仏塔が照明にてらされて、敬虔な姿を浮びあがらせていた。

この三月には総選挙が行れると云う。街には一賛成の方は白い箱に投票を」と記した立看板が見られる。民政に変わるとする新生ビルマ、その発展と隆盛を期待してやまない。

病気の今昔

貝塚 恍

既に三十数年前になつた第二次大戦当時、最も恐れられた伝染病ペスト・コレラと戦つていた我々ビルマ第二十六野戦防疫給水部の一行にとっては、現在のビルマの病気の状況とが、部落を共に廻つた医師、通訳の消息を知りたい事も、今回の旅の念願であった。幸い一昨年も訪緬した中村源三君と同行した、守山市の千代蔵博士がマンダレー方面の数人の衛生関

係の人々と文通しておられたので事前に我々の希望を伝える事が出来た。

マンダレーの空港には四人の人々が機の到着が数時間も遅れたにもかゝらず待ち受けていて、三日間のこの地滞在中にいろいろの手助けをしてくれ、次の様な事を知り得た。

イラワジ河の会戦に敗れた日本軍が退き、英印軍が再びビルマを占領、其後三年経てビルマが独立を獲得するまでには、紛争・内乱が続いた様で、通訳をして我々に協力した一部の人は気の毒にも被害されており、又その地をれて遁身を隠した人もあつた事が判明した。

当時(一九四四年)北ビルマにはペストが多発し、私共がウチエ医師と共に防疫に廻つたシェエボ地区でも百名に及ぶ現地人の発病があつた。一九四六年のビルマ全土のペスト死亡は二七四三名に及んだが、一九五四年には一五七名に減り、現在ではペストもコレラも殆んど無くなつたとの事である。三十数年前の再会を喜んだ六八才の医師ウチエ医師は、シェエボの町の名士として悠々自適していた。又その家庭に我々を迎えてくれたシェエボ病院、技術師のアウン氏の主な仕事はマリリアの検血作業であると云つていた。嬉々として我々の周囲に集まる子供達は体格、血色も良く、往時の様にマリリア牌腫のため大きなお腹をしてゐる子供は見当らなかつた。

蚊は少くてパガン、ラングーンでは一匹も見当らずマンダレーのホテルで蚊齎を見出したのみであつた。我々は念のため予防内服を行つたけれども、マリリアの危険も非常に少くなつた様である。

当時パゴダに参詣すれば乞食と共にハンセン氏病に悩む人々を見出したものである。今ではこの様な姿は無い。WHO(世界保健機構)の一員として勤務し我々一行を数日にわたるマンダレー市を案内してくれたモンチョウ氏によれば、ハンセン氏病患者は登録、管理されスペインやマレイシア、より来るWHO医師と共に日本製の薬剤によつて治療を行っているとの事である。

現在ビルマ国で最もその撲滅に努力されているものは上記のほかリツケチアによる発疹熱、性病、トラホームなどである。

シェエボでは一行にビルマ料理の一つであるモヒンガー(麵類)が出されたが二年間もこの地の現地食に馴れた我々は喜んで食べた上、本当のビルマ式の匂いの強いナンナンと云う草をふりかけて味わる事も出来た。 虱はまた各地に見られるので、ほとんど火にかけられるビルマ料理には危険はないが、生水とか、虱のよく集るチャナナガ(黒砂糖)を口にすることは、アメーバ赤痢などの感染予防のためつしまねばならない。 ともあれ再び暖かい心で一行を迎えて下さつた思い出のビルマの地は、敵弾以上に我兵士を死に追

いやつた恐るべき病氣も、次第に無くなりつつあり、真の理想境に近づきつつある事が感じられ、誠に喜ばしい次第であつた。

留学生(研修生)コーナー

伝説の鳥「ヒンダア」

京都大学ウィルス研究所

研修生 ウ・テツ・ウイン

ビルマでは、昔から鳥に就いての沢山のお話が所謂「伝説」とか「口碑」として継承されてきました。が、数ある「伝説」の中でも、「ヒンダア」に関するものが最も有名であります。そして、「ヒンダア」に関する沢山のお話が、歴史上又は地理上の事柄に関連して継承されてきました。

「ヒンダア」は黄金色の鳥 「ヒンダア」は、黄金色の鳥ですが、やはり「あひる」の一種である事には相違ありません。それも、あくまで歴史上では黄金色であるという意味です。

併し現在棲息している「ヒンダア」の子孫達は、胸の部分だけが黄金色で、外の部分は赤・緑・黒の重合色をしており、よくイラワジ河畔で、数百匹が群をなして浮遊しているのを見かけます。

又、これまで、「ヒンダア」は装飾品として利用されてきたし、昨今でも尚ほビルマの人達は、「ヒンダア」を一種の飾り物として又は標章として使っています。

例へば、MEIC(ビルマ輸圧入公社)では、「ヒンダア」の図柄を公社の標章として使っている

と云つた具合です。

二、「ヒンダア」の夫婦物語 昔々、ある所に一番の「ヒンダア」が棲んでいました。彼等はお互いになら愛し合つていましたので、二匹は何処へ行くにもいつも一語でした。

ある日、二匹は揃つて新しい棲家と餌食を探しに出かけました。が、行くことも、見つかる事が出て来ず、とうとう、涯なき大洋に出てしまいました。

併しながら、突然、幸運にも一塊の土けらを発見しましたが、残念ながらその土けらは小さ過ぎてその上には一匹しか止る余裕がありませんでした。

勿論、彼等はすっかり疲れ切つていたし、羽根を休めなければ、そのまま大洋に落ち込んで溺死する外仕方のない状態でした。

併し、それでも一匹だけは止れる場所があるのです。さあ、彼等には一体何が出来るか云うのでせうか?それは全く難しい事です。

賢い夫の「ヒンダア」は、察早く腹を決めて、妻に、自分の背中の上に乗る様に命じ、自分は一塊の土けらの上にとり、やつと難を逃れたとの事です。

以上が、一塊の土けらに救われた「ヒンダア」夫婦の物語です。 扱て、その一塊の土けらこそ、ペギーの町なのです。ペギーの町こそ、涯なき大洋に囲まれた一塊の土けらの一番高い所だつたと考へられます。

現在、ペギーには、背中に妻を乗せた一番の「ヒンダア」の記念

碑が立っています。此の記念碑に
巡って吾は「ヒンダア」夫婦の愛
と献身そしてペギーの地理と歴史
を知る事が出来るのです。

皆様、ビルマへ行かれたら、
ペギーにある「ヒンダア」記念碑
をお見逃しにならない様にお願
いします。

三、「ヒンダア」懺悔
七年前、まだ私がランゲーン大
学の学生だった頃です。

その年の夏休みに、オンレンの
町へ行き、偶々、イラワジ河畔で
行はれた「狩鳥大会」に参加する
機会に恵まれました。居るわ、居
るわ、数百匹の水鳥が群をなして
浮遊して居り実に見事な壮観でし
た。私がその大群に見とれてい
ると、突然、私の友人が、一発ぶ
つ放したが一匹に命中してころりと
倒れました。その時、私の眼に奇
妙な情景が映りました。

一匹の水鳥が、死体の近くにや
つてきて、その周囲を「ギャアギ
ャア」わめきながら、廻っている
ではありませんか。そして決して
逃げようとしません。私は瞬間
それが殺された「水鳥」の夫であ
ると気付きました。私はそれを見
て、悲しみと悔恨の念に打ちひし
かれ、友人にもう打つのを止めて
くれる様に頼みました。

友人は打つのを中止し、それ等
が「ヒンダア」の子孫である事を
教えてくれました。

成程、その胸は黄金色でした。
その時、私は「ヒンダア」の歴史
彼等の愛と献身に就て想起しまし
た。

その後、私はもう二度と動物を
狩猟したり殺したりはしまいと決
心致した次第です。

研修生短信

昨秋、「コロンボプラン」に依
り、来日、専門の「水理学」を研
修中のパイ君は「応予定を終了」し
三月末日帰国します。帰国に際し
左記の書簡を協会へ送って来まし
たので御披露申し上げます。(保
科記)

帰国に当り、日緬文化協会の皆
様に「サヨナラ」を申し上げます。
そして私の滞日中私に対し皆様の
寄せられた御親切、御協力、おも
てなしに厚く御礼申し上げます。
私は滞日中のすべての事柄に非
常な満足と幸福を感じています。
この事は、とりもなほさず、職
務に忠実なOTCA(海外技術協
力事業団)の皆様、情味溢れる数
授の方々、並びに御協力を賜った
協会の皆様様のお蔭であると信じ
ています。

私は、協会の皆様並びに私の
訓練に関係のあった方々が、ビル
マへ来られた時には出来る限り
の御世話をさせていたゞくのが私
の務めであると考えています。
従って、将来、協会の皆様様ビ
ルマへ来られる時は必ず、私に手
紙なり電報で知らせて下さい。私
は必要なあらゆる段取りを致しま
すから。大変有難うございま
した。

尚ほ、ウ・パイのビルマの住所
及び勤務先は左記の通りです。
Office: Department of
meteorology and

hydrology. Director
of hydrology. Kabaye
pagoda Rd. Kabaye,
Rangoon, phone: 60524

Home: No. 422, Schlichin
Ura Street, thBlock,
Thalseta, Rangoon. Upike

「蒔絵」一幅贈呈される
ニイ・ニイ博士より当協会へ

今般、ビルマ国鉱業大臣ニイ・
ニイ博士(当時文部副大臣)より
当協会へ横九十種縦五十種の蒔絵
一幅が贈呈されました。
此の蒔絵にはビルマの伝説の鳥
「ケイン・ナイ、ケイン・ナヤ」
一番が実に流麗な筆で画かれてお
り、此の鳥は「暖い愛情」を象徴
し、当協会の「シンボル」に恰好
なものとして、贈呈されたとの事
です。

現在、当協会本部に保管されて
います。
(一月下旬、訪緬した第二回当協
会親善訪問団に委託されました)



ビルマ国へ「脱脂用分離機」
寄贈
会員 山下松子様の美華

静岡県浜松在住の協会員山下松
子様には、かねてより、ビルマ大
使館を通じてビルマ国へ金百万円也
の寄贈を申し出ておられました。此
の御芳志に対し、ビルマ側より
「牛乳脱脂用の分離機」を希望す
る旨、連絡がありました。

由つて、先月、植田酪農工業製
の同機を購入、贈呈されましたが
駐日大使を如めビルマ側はその御
芳志に対し、萬腔の敬意を表する
と共に深甚なる謝意を表明されま
した。
茲に同氏の善意を広く紙上を通
じて御披露申し上げます。(塔本記)

台湾の会員よりの書簡
バンコック在留の饒三氏(台湾
の会員)より過月、同氏の親友梅
原保氏(理事)宛に左記の如き内
容の書簡が送付されて来ました。
現在、発展途上国に於て、何か
と批判の対象となつて居る日本国
に対し、熱烈なる情愛と思索の念
を有しておられる同氏の書簡を御
披露申し上げ、お互いに何か感得
する所があれば幸甚です。(保科
記)

梅原様も御元気でビルマとの親
善に一生懸命に御活躍され、心よ
り感謝しています。
貴方様の御手紙に依れば、一月
六日出発予定の名古屋を主とする
訪緬団は三井航空サービスに世話
方を依頼されたとの事ですが、未

だ三井航空サービスから連絡はあ
りません。併し、当方の東京支店
へは、連絡済みですから何卒御安
心下さい。

とに角、ビルマへ訪問旅行され
る友人があれば必ず御知らせ下さ
い。又今後、団体で行かれる場合
縦へどこの旅行代理店へ依頼され
ようと気にかかないで下さい。
私は日緬文化協会の一会員とし
て、日緬親善に努力し、将来、日
緬一体の花が咲く事を期待してい
ます。

それから、私と貴方との友情の
絆は一生断ち切れる事はなく、又
日緬親善の花が結実するまで続く
事を切に願っています。
此の事は私の一生の義務であり
使命であると思っています。
此の十一月頃に突然起つた石油
問題で日本の工場も大変混乱して
いると思ひます。泰国も同様で、
紙・鉄・合成樹脂、その他の基礎
資材の不足のために経済的混乱に
陥つて居ます。此の事は政治問題
には波及し十月十四日には大学生
も騒ぎ出しました。
こゝに、金五千元也を同封して
お送ります。どうぞ御受取り下
さい。

末筆ながら日緬文化協会の会員
の皆様のお健康と御多幸を祈りま
す。
同氏の住所は左記の通りです。

312-3, Sion Road, Bankok,
Thalana, T.V. 旅行社
電話 38419
34721-2

ビルマ国へ「学童の国画」
送付

總てよりの懸案であった「日緬
両国学童の国画交流」に就ては担
当委員の格別の努力に依り、名古
屋・京都両地区で多数の小学校か
ら協力の申出があり総計三百七十
七名の劣作があつりました。

由つて、昨年末、京都に於て最
終的な委員会を開催して作品の整
理、岩内委員に依り、英文メッセ
ージ、英文リストの作成を行い、
一月六日、訪緬した第二回協会親
善旅行団(团长小菅副会長)に委
託送付しました。

本運動は、今後とも継続して実
施する予定で、委員会に於て、爾
後の具体策を検討中である。(塔
本記)

ビルマ教育視察団来日

十一月十五日、ビルマの教育視
察団一行十六人が国際協力基金に
依り昨年の第一回に引続き、来静
されました。

静岡大学工学部(浜松)に留学
中のウ・ティン・アウンとウ・
ミン・チイの二人は、通訳として
お世話をすべく、午前十時、一行
を静岡駅に迎えるため駆けつけま
した。

午後五時半より、静岡市「ホテ
ル・ニューヤシマ」にて、ささや
かな歓迎パーティーをいたしました。
協会東海支部の県内在住会員
七人(鈴木節・山田元・山下・菊
池・佐竹・竹島・石塚寿)と、静
岡県ビルマ会結成準備委員及びビ
ルマに縁故のある大学、高校関係
者が出席。

視察団は文部省の役人が七人、
他の九人のうち八人までが中高校
長で、女性が三人。

拍手の中を入場した一行は、一
列横隊に並んで、歓迎の言葉をう
けます。石塚経雄静大教授は「先
づ私も三十年前ビルマの皆さん
にお詫びいたさねばなりません」と
挨拶して、ティン君が緊張した面
持で通訳します。次いで山田元八
理事が得意のビルマ語を交えて、
緊張をほぐすこと三分。乾杯から
賑やかなパーティーにうつりまし
た。

校長先生といつても若い方が主
力で、服装も地味な先生方でした
が、女性の民族衣装が色どりを添
えました。何といつても、こちら
はビルマ語も片こと、英語も亦片
ことで、意志の疎通には甚だ不充
分でしたが、私どもの心の中は、
解つていただけたいものと思いま
す。約一時間半の交歓の後、ウ・
ダウン・オン团长がお礼の言葉を
ビルマ語で、最後にどうもありが
とうと日本語で結び、午後七時、
おひらきとなりました。

一行は十九日まで県内各地をま
わり、二十日静岡発京都へ向つ
た。静岡県下の教育視察を終へた
一行は、廿日夜東京、廿一日は昼
間は市内観光に出かけて古都の晚
秋を満喫、夕刻宿舎の京都ホテル
へ帰り、夕食後、ホテル地下のキ
ャフテラッセでお茶の会を催し
た。出席者は酒井副会長を始め塔
本・森・馬場・山田(昭)・池田
・田口・保科の各協会員、在京留

学生(研修生)のウ・パイ、ウ・
テツ・ウイン、ウ・ティン・キ
ウの三名。

酒井副会長の歓迎の辞、团长ウ
・トン・オンの謝辞に始まり、始終
なごやかな雰囲気、言葉こそお
互いに充分通じ合はなかつたが
心には充分通じ合はなかつたが
事と思つた。女先生方の質素なれ
ど清潔な服装、つづらな人なつこ
い澄んだ瞳が殊の外、印象的であ
つた。

最後に先生方に順次自己紹介し
てもらつたが、勤務地がビルマ全
土を網羅し、特にチン丘陵のティ
ーデム、北緬の涯のミットキーナ
辺りからも来ておられる事を知り
全く感無量でビルマ教育政策の普
遍性、均一性への努力の一端が窺
えた。(石塚、保科共述)

花嫁姿

—ビルマ留学生の送別会—
東海支部

目がパッチリして、実に清々し
い、普段細っそりして小柄なのが
何んとどうも高島田打掛の花嫁
姿になると柄も大きく実には立派
だ。盛んな拍手が自然に湧いた。ビ
ルマ留学生チー・アウンさん
が名古屋大学理学部で数学を専攻
したのは三年前であつた。日本語
がうまく性格が明るく留学・研
修生の中の紅一点だつた。一足先
に帰国したニヤン・トー君とは同
君の在日中に同君と婚約、この三
月アウンさんは芽出度く大学卒業
帰国して結婚することになってい
る。そこで日本の想い出のために

日本の花嫁姿で送別会をしようと
いうことになり支部会員の肝いり
で、小菅夫人、浅井夫人介添えの
花嫁姿送別会となつたのである。

二月十七日地元会員三十五名に
より、本部酒井副会長豊中市の笹
木カツミさん、静岡より山田元八
理事参加、会場は護国神社内桜華
会館の式場、全員が礼装でまず花
嫁中心の全員写真が撮され、引き
つゞき披露宴ならぬ送別の宴会と
なつた。アウンさんに前後して帰
国するアウン・ジー君アウン・テ
ィー君ら二名の人達を含めて。小
菅支部長の挨拶が誠に親情あふれ
山田元八理事の流暢なビルマ語の
挨拶は正直に云つて我々にはわか
らなかつたがビルマの人達にはよ
くわかつたことであろう。石村卓
氏の送別のことばと心の籠つた贈
物(従軍文画集)はよい記念にな
ることであろう。恒例のごとく花
嫁の打掛姿は振袖になり、お色な
おし二回、そのたびに大勢のシャ
ッターが切られた。このビルマ花
嫁に並んで花嫁然と写真をとつて
もらう老青年もあつた。

然しこの花嫁さん終始笑顔絶や
さなかつたが、生れて始めてこの
たいへんな着付で流石にすんだあ
どの「モーレ」は嬉しい悲鳴であ
つたらう。岩内先生のビルマ国歌
は我々には初めだつたが、ビルマ
のよき若人たちには感慨深いも
の、みんな真面目に唱和してい
た。彼らは故国へ帰れば必ず指
導の立場につくであろう。前途に
幸あれ、ビルマのために、(吉岡
和雄記)



ビルマ73度ベストセラ
ドウ・ママレー作「肉親」
に就て
大外大ビルマ語科教授
原田 正春

吉田少佐とビルマ婦人の遺児で
優秀なモンモンという少年は、幼
くして深い屈辱を不断に受けたこ
ともあつて大学生になつてからま
すすはげしいナシヨナリズムに
走り、これがため却つて頑くかな
排他的な人となつてしまふ。おそ
らくは父ゆずりの一面が別な形で
あらわれたのであろう。
そこへ突加として義理の姉の日
本女性が祖父の願いを果たすべ
く、またヒューマニズムの立場か
ら日本語の教師としてはるばるラ
ンゲーンに赴任し、その傍ら弟を
探し理解を求め何らかの手を差し
のべようとつとめる。
間を取りもつ大学の国文学の先
生は気をまわしすぎ親切すぎるき

らいがないでもなくメルヘンの愛なり恋を試みているようにとられやすいが、決してそうではない。可愛想な弟を引きとって育てあげた。この養兄の涙ぐましい努力にも拘らず終り近くまで弟は姉と絶縁状態をつづける。息苦しくやり切れない場面が繰り返えされ、この緊迫が遂に解かれたとき眼を切ったように感動が興り、そのくだりにきて読んだビルマ人は皆泣いたという。(作者の手紙から)

作はエキゾチズム、ウィット、情緒、ユーモアなどが織り成されパラドックス的手法を用いドラマチックに展開し、さらに大げさいえはヒューマニズム、ナショナリズム、ロマンチズム、リアリズムなどが渾然一体化されている。また単なる反帝・抵抗の文学でもない。構成がうまさきで作者の意識的技巧が気になるが、女性(58才)でなければ書けそうもない面もよく出ているばかりでなく、終始冷静かつ公平に運ばれているところは作の価値を一段高めている。しかし見逃してはならぬポイントには基調として理解と親善と文化交流をうたいあげている点である。(筆者は当協会特別会員)

尚ほ著者ママレー女史の略歴は次の通りです。

○一九一六年、ピヤホン区カマカール村生れ、父はピヤボン区ボガールのドウサン銀行の支配人であったウ・ピヤ・チョウ、母はドウ・クエ。

○一九三七より作家活動に入る。前夫、ウ・チツ・モンの設立した「ウィークライ、サンダラ

ー」及び、「ピープルズ、フォーラム、デイリー」「リタラリ・ジャナル」の発行人兼編集主任。

○一九五五年、作品「憎むべき故に非ず」に依りサーペイ・ペエイクマン文学賞を得る。

○一九五五年、ビルマ作家協会の終身会員兼会長。

○一九五四年以来、世界平和協会ビルマ支部の副会長。

○一九六一年より六二年まで、作家芸芸協会書記長。

○一九五二年十月、ソ連へのビルマ文化使節代表団のメンバー。

○爾後、インドのアジャ作家会議のビルマ作家代表派遣員、中共へのビルマ文化使節団員となる。

○一九五八年八月、広島の反原爆平和会議の代表。

○ウ・アン・ツエ・ヤと結婚。

○前夫との間に一男二女あり。

〔Whor who in Burmaより〕

尚ほ現在、原田教授は此の作品を日本文に翻訳中で今秋、出版の予定です。御期待下さい。(保科記)

朝市

ティンモープ

心地よき暁の陽気
バルミヤ椰子の木陰
すがすがしい微風
流蘇・櫻のもと

一樹に一級
クラスの鐘は鳴る
綿繰りつつ暗唱す
仕上げつつ書に親しむ

庭先の勉強会

われら田園の仲間たち
行く朝市は活気づく
おはよしドンドン
こだまする天地
いこうよ皆の衆
朝市へ

此の詩はビルマ国文部副大臣ニイニイ博士(現在鉱業相)が、当協会に寄せられた新年の挨拶状に載せられたものです。同国で目下実施中の文盲一掃運動の様子が実に明るくさわやかに、書かれています。日本語訳は大外大の原田教授に、お願いしました。(保科記)

常務理事会議決事項

去る二月九日京都市内平安寮に於て常務理事会を開催次の事項を審議決定した。

一、後任会長の選考に關し全員推薦の有力候補に対し至急就任を懇請する。

一、各専門委員会の活動促進の爲夫々責任者を決定。

一、各専門委員会(長) 小菅信一
会長選考委員会(長) 保科賢一
広報、会報 〃 保科賢一
留學研修生協力 〃 保科賢一
会員増強 〃 小谷隆英
日緬文化協定締結促進 〃

坂田 泰
法人格取得 〃 梅原 保
学童図画交流 〃 塔本成幸
一、会計担当理事を原則として一期(二年)毎の交替制とする。

一、本部に於ける事務の煩雜(会員増加に伴う)を解消する爲、出来るだけ早く専従職員を雇備を実現出来る様に努力する。

一、第二回図画交流は本部に於て総数を限定し会員個々の分担を決めて協力を要請する。細部計画は委員会に於て立案する。

一、関東支部提案に關する件

和田一義氏及び藤ふくや商店より協会が寄贈を受けた衣料品はビルマ大使館を通じビルマ国へ贈呈する(梱包輸送費協会負担)

群馬県館林市に於けるビルマ展の計画に付ては尚細部を検討の上協会は協賛の立場で出来るだけの協力をする。

一、第二回訪緬親善旅行団は成功裡に帰国しビルマ側に於ける協会に対する詳細が著しく高められて来ているので、引続き第三回の訪緬団の編成等に至急着手する。

一、その他

会報送付先に外務省担当課、ラングーン日本大使館及び附属小学校を加える。

会費未納者に対する督促。会員名簿の印刷(本年度総会迄と予定)。

ドクター、ニイニイ来日招請に關し具体的な準備促進に努力する。

諸物価高騰の折柄、無駄を省くと共に予算の再検討を実施する。

青年層の会員獲得の爲、会費の徴収に付て会則(附則)を検討決定する。

その他 以上

出席者
小菅信一、酒井栄一郎、保科賢一、梅原保、桑原真一、長谷川

元信、中村源三、塔本成幸、山田元八、浅井時二郎、吉岡和雄、吉田弥三郎、山田親英、池田正隆。他に委任状八通。(塔本記)

寄付者御芳名

二、〇〇〇円 筒井斌子
四〇〇〇円 吉市繁光
一、一〇〇円 林 六郎
一、四〇〇円 饒 三
八、〇〇〇円 篠原信男
一、〇〇〇円 久本田鑿
一、二、九四二円 チャット会
三、〇〇〇円 秦 健三氏
右御寄付賜りました方々に、誌上を通じ厚く御礼申し上げます。(総務部)

計 報

今般、左記の会員の方々が他界されました。茲に謹んで衷心より哀悼の意を表すると共に会員諸氏に紙上を通じて御知らせします。

昭和四十九年三月

会長代行 小菅 信一
熊本県玉名郡玉東町木葉七五七 安成 維良氏
滋賀県近江八幡市上田町六一七 橋口 清氏
名古屋市中区東区矢田町五一三三 中村喜太郎氏
大阪市住吉区万代一丁目四二 小森 計三氏

お知らせ
ビルマ国を長期に亘り、団体で

訪問旅行しようと切望される旧日本軍人の方々は、今後、当大使館に期間十五日までのビルマ滞在可能な観光ビザの発行を申請出来ませぬ。

ビルマ大使館 在東京 (文責保科)

ビルマ沖で石油開発へ ワールド・エネルギー

第一勧銀グループ(DKB)首脳が九日明らかにしたところによると、同グループの共同開発会社であるワールド・エネルギー開発(代表取締役伊藤忠商事社長)はビルマ沖での石油開発にイタリアのENI(炭化水素公社)と提携して乗り出す意向を固め、ENI側と具体的な折衝にはいった。ビルマ沖の開発には現在日本側からは三井、三菱グループが石油開発公団と連携してビルマ政府と折衝しているが、DKB||ENIグループの交渉がうまく実現すると、将来両ルートから対日原油供給の道が開ける公算が出てきた。

世界的なエネルギー危機の中で現在、東南アジア周辺では北ベトナムのトンキン湾、中国の渤海湾インドネシア近海などに埋蔵されている豊富な海底油田が世界的な注目を集め、日米欧の有力企業が開発について積極的な動きをみせている。こうした情勢下で、かねて良質の油田があるとみられていたビルマ沖の開発も脚光を浴びてきているもので、現在、ビルマ政府は米、英、仏などの有力メー

ヤー(国際石油資本)や西独、イタリア、日本企業などと試掘、開発についての交渉にはいって

関係筋によると、ビルマ政府は

これまでの、交渉で、交渉相手を九社にしぼり、今月中にはさらにこれを六社にして、開発権益を与える段取りとなつて、これまでのところでは、最終的な交渉相手六社の中に日本グループ(三井、三菱両石油開発と公団)は参入出来るとの見通しが強まっているが、割り当てられる鉱区によっては採油条件の悪いところもある模様で、情勢は楽観出来ないといわれている。

このためDKBグループでは日本グループの要請があればこれにも協力するが、その一方で現地政府と密接な関係にあり、また探鉱技術についても世界的に定評のあるENI側と提携、積極的に同地区の石油開発に参画する方針を決めたものである。

DKB首脳によると、ENI側はビルマ沖での開発協力にも意欲的といわれ、今年中には連携策などについて交渉がまとまるとみている。

なおビルマ沖開発については三井、三菱両グループが公団とともに一本化して鉱区獲得に動いているが、芙蓉、三和、住友など他グループでも開発参加に大きな関心を示しているだけに、今後、DKBグループのよう組に、外資側とんで結果的には三井、三菱連合と競合する動きに転ずるケースも出

てくる可能性も強まっている。(一月十日付日経)

戦時中世話になつたビルマ船訪問

☆:「戦時中はビルマで大変お世話になつたものです」一月廿四日、神戸港・兵庫突堤に接岸中のビルマ貨物船「カレワ号」(七七八〇トン)にウ・テンジョ船長ら四十人乗り組みに、プレゼントをどきりかかえた日本ビルマ文化協会・長谷川元信理事ら代表六人が訪船した。

☆:同協会は戦前戦後をビルマで過した人たちに組織、横浜、名古屋など各支部ごとに入港するビルマ船を訪問して乗組員たちと現在のビルマのまようや、なつかしい昔話をしたり、各家庭で留学生を食事招待して又好を深めておりこの日も京都大学工学部に在学中の・パイさん(30)ら三人が招かれて同行した。

☆:あいにく船長は上陸して留守だったが、当直のキン・マウ二受航海士27に、長谷川さんらはカラーで風景や日本庭園を印刷したカレンダーや、ビルマでは珍しいリンゴを贈ったあと、なつかしそ

新入会員となつて

久木田 堅

恥しながら、私はどんな会に入会する時にも人にすゝめられ、又止むなく入ると云う外には、自ら進んで入会を懇請した事は五十年間一度もない。今回念願叶つて日緬文化協会に入ることが出来て

「してやったり」とほくそ笑んでいる一人である。西宮の長谷川氏と知り合つて一年有余になる。その間会つたのは二回だけだが、無償の協力、善意の外は何物もないと云う異民族との交流、人間の美しい心の結ばれを基幹として設立されたこの日緬文化協会は私の終生探した求めていたものであった。

長谷川氏から聞いた「ケ」の字も聞かれなかったが、そのビルマに対する日本人の心のあり方には感動した。こんな人々が集まり一の力を十にしたらどんなに素晴らしいものだろうと私は根掘り葉掘り聞き、無ければ造らうじやないかと云う積りでいた。その答えが日緬文化協会の存在であった。早速入会させてくれと頼んだら、長谷川氏は快よく入会手続きをとって下さつたのである。生きるか死ぬかの土壇場で敵味方を越えて助けてくれたビルマ人はその数が只一人であつてもビルマ人は立派な世界の一流人であり人間の純粋さを持った尊敬すべき国民である。それに負けないものを世界一流の工業国の日本人の我々は持っているであろうか。無償の協力精神があれば、他国の資源でもうけたものはその利を分ち与える気にもなる

であろう。現在のような東南アジア各国の日本観は生れなかつた筈である。この日緬文化協会の設立主旨は今後の日本の反省と方向を指針している唯一の具象的なものである。それを構成する我々会員はビルマの向上と発展を思い、協

力する外、何もないと云う信念を貫く事こそ、新会員に課せられた覚悟ではないかと思つている。進んで自発的にこの協会に馳せ参ずる人々がふえる程、日本もビルマも輝かしい未来を期待出来るように思ふものである。

人夫々に知友あり、知らざる者には納得させ知る者とは語らい会の拡充に心がけたい。私は大阪市内の一齒科開業医に過ぎない。職業的な世界を異にする知人も居る。自分の生きる範囲ではさ、やかな協力能力を誰でも持つてゐる。自分の利益はいさ、かも期待出来ない協力、物質的には永久に損失が続くこの協力は物以上の利益を会員の心の中に培つてくれる。無形の利益こそ無償の協力から得られる唯一のものである。

協力はその物の多少ではない。協力しようと云う心のあり方である。その心が物の形となつて現われる時、その物は生命を具えるのである。物も心も協会に投ぜられればそれは生命を具えた本当の新しい価値として甦える事である。

日緬文化協会は以上の意味で現代日本では他に類をみない卓越した人々の集りとも云える。自負と云うものがあるとすれば、日緬文化協会である。事こそ大臣にも優る良友を持つ自負と云えよう。